

第 10 章 遅い小学生時代Ⅳ：1952 年夏（15 歳）

ついにフランスの地を踏む

トゥールーズ (Toulouse) の空港には、軍医のダビドゥー中尉が迎えに来てくれた。私は、ダビドゥー中尉のことは以前からよく知っていた。彼は以前、アウレフの駐留軍基地の医務室に勤務していて、学校の長い休みの時などにはよく、私がフランスの文通相手に出す手紙を添削してくれたものである。彼はこの時、階級が大尉に昇進していた。大尉は、あいにく軍医の仕事が忙しいとかで、私は彼の両親の家に預けられた。ダビドゥー大尉のお父さんもお母さんとても優しく、特にお父さんは、滞在中私をいかにして喜ばせるかに心を砕いてくれ、街のあちこちに連れて行ってくれた。私も、どんなに楽しく、どんなに満足しているかを、小父さんと叔母さんに一生懸命伝えた。本当に興味を引かれることがたくさんあって、何度も小父さん達を質問攻めにしてしまった。トゥールーズの田舎に連れて行ってもらったこともあったが、その田野の緑は、アルジェリアの北部のそれよりもなおいっそう青かった。

独りぼっちの列車旅

当時電話はまだ交換手を経由していた。ほとんど毎日、周囲の人々が、私の旅程のことで、「これこれの番号につないで下さい。」と、どこかの誰かに電話を掛けていた。フランスに上陸してから 5 日ほど後、私は再び一人で旅立った。今度は列車の旅だった。トゥールーズからオーリアック (Aurillac) を経由してのオセールまでの旅はとても長かったので、乗換駅で列車を間違えないよう、乗換の度に車掌に見せなさいと、私は書付をもらった。私は心の中で、アイン・セフラでのようなへまは二度としないぞと誓っていた。それに少しは、この文明社会にも馴染んで来た自信があった。実際、道中は乗り換えるべき駅で降り、正しい列車に乗ることが出来た。私は、必要なら車掌にひっついていくことにしたのだ。切符を見せてどう尋ねればいいのかの要領もつかんだし、待ち時間がたくさんある時は、ふらふら歩き回ったりせず辛抱強くじっとしていた。周りには黒人など他に誰もいなかった。私はなんだか世界中からじろじろ見られている気がした。

当時トゥールーズからオセールへ行くには、一日の約 4 分の 3、つまり 18 時間あまりもかかった。全て順調に進み、列車は最終目的地の一つ前の駅まで来て止まった。私は、いよいよ次で降りなければと緊張した。その時、男の人が三人、列車の脇のフォームを駆けて来るのが見えた。彼らは「ハジ君、ハジ君！」と私の名を呼んだ。よく見ると中にはユーゴ先生もいるではないか。実は、この駅が降りなければならない駅だったのだ。ユーゴ先生の顔を見た途端、私のそれまでの不安は一瞬でどこかへ消し飛んだ。列車から降りると、ユーゴ先生は連れの二人を紹介した。シャンプレーランの学校の校長先生のカネ (Canet) さんと、教師の一人ポヨ (Poyot) さんだった。駅前には旧式の黒のシトロエンが駐車してあったが、私たちはまず駅の隣のカフェで休憩した。その後、私たちを乗せた車は、両脇に木立がどこまでも続く街道を走り始めた。沙漠のでこぼこ道と、なんという違いだろう

か!

車はカネ先生が運転していたが、皆私に質問を浴びせかけた。「旅行は良かったかい?」「疲れてないかい?」「フランスの感想は?」「居心地は悪くないかい?」などなど。車は走り続け、私は左右に流れる緑の並木を眺めながら、一体誰がこれらの木々に水をやっているんだろうと不思議でならなかった。沿道の両側の木々は、時には左右から互いに覆いかぶさって、まるでトンネルのようになり、外の景色を見えなくしてしまっていた。夢のような景色に夢中になっていた私は、同乗者の面々からの質問にも半ば上の空で返事をしていて。何の質問に答えようとしたのかは覚えていないが、私は「ジェ・クロワイエ (j'ai croyé=私は…と思いました)」と言いかけた。

「違うよ!」と、ユーゴ先生がびしゃりと言った。

「《思う》は不規則動詞だ。不規則動詞の過去分詞は i か is か it か、あるいは u で終わるんだ。」

私は返すべき言葉を失っていたが、構わずユーゴ先生は続けた。

「だから、君はジェ・クリュ (J'ai cru) と言わなければならない。さあ、繰り返してごらん。」

「ジェ・クリュ」と、私は素直に復唱した。

「よろしい!」と、ユーゴ先生は言った。

この時は本当にびっくりして、この時の先生の言ったことは、一言一句まで覚えている。ユーゴ先生は続けた。

「ここにいる二人、カネさんはシャンプーランの校長先生だし、ポヨさんもその先生だ。二人の前では特に正しくフランス語を話すよう気を付けなさい。君はここにフランス語の上達のために来たのだからね。上手い具合にフランスでは学校はまだ休みに入っていないから、君は何日か休息したら、このカネ先生のクラスに入って、フランス語を一生懸命学ぶんだ。」

オセール到着

途中もう一度カフェで休憩し、その後ようやくシャンプーランの学校に到着した。学校の敷地に車が入っていくと、ちょうどリクレーションの時間だったらしく、校庭は男女両方の生徒で一杯だった。みんな私たちの到着を待っていてくれたらしい。私の文通相手のミッシェルが真っ先に私の前に進み出て、私たちは握手した。それを皮切りに他の生徒も次から次へと握手を求めて来た。簡単な挨拶が済むと、カネ先生が私を紹介した。

「彼はこれからしばらく私たちの学校と一緒に学びます。皆さんは、よく助けてあげてください。」

次にカネ校長先生は、私を自分の家へ連れて行った。カネ先生の奥さんと、先生の義理のお母さんが、まるで暫くぶりに息子の一人が帰って来たかのように迎えてくれた。彼らのキスを頬に受けて、私はなんともほっこり暖かい気持ちになった。ふと、学校を卒業するまでこのままここにいられたらいいのに、という考えが心に浮かんだ。私があてがわれた

部屋には、ベッド、テーブル、椅子などがそろっていた。私がベッドで寝たのはアルジェのホテルが初めてだったが、その後アルジェとトゥールーズで泊めてもらった家庭でもベッドだったので、もう慣れていて、また、初めは、フランス人の家の家具のなんと贅沢なことかと驚いたが、この頃にはもうだいぶ目に馴染んでいた。



イメージ画像：北フランスの旧市街（2011 年訳者撮影）

さて、シャンプールンの学校へ通い始めると、フランス語を母語とする子供たちに囲まれて、私は自分のフランス語のレベルの低さを思い知る羽目となった。一方で、新しい級友の家族はこぞって昼食や夕食に私を招待したがった。皆が「ぜひとも我が家に来てほしい！」と言って譲らなかった。そこで校長先生は招待者のリストを作ったが、それはとんでもなく長くなり、私がフランスを離れる前に全部回り切るのが無理なほどだった。カネ先生とポヨ先生は隣り合わせの官舎に住んでいたため、私は二つの家を頻繁に行き来した。カネ校長もポヨ先生も、しょっちゅう私をどこかへ連れて行ってくれたが、彼らが運転する車に乗って出かけるのが、私にはなにより楽しかった。私は、工場や大きな農園、それにびっくりするような大きな公共事業の工事現場を見学した。

ユーゴ先生が、アウレフの学校の協同組合の商品を多量に持って来てくれていたので、シャンプールンの学校でバザーを開催することになった。プーランさんは、リヨンヌ・レブブリケーヌの記者であると同時に、この学校の体育の先生も務めていたので、彼の新聞にバザーのお知らせを載せてくれた。皆指折り数えてバザーの日を待っていた。バザーは非常な盛況で、ダンスパーティーも催された。私も初めてダンスを習った。来てくれた人たちは皆、単に楽しむだけでなく、誰かの助けになるならばと、こぞって協同組合の商品を買って行った。商品は完売し、バザーは成功裏に終了した。アウレフの級友がこのことを知ったら、きつともっとがんばって活動しようと思うに違いなかった。

この一週間後、学校では遠足があった。大勢の生徒と引率の先生たちでバスに乗り、160 キロ離れたパリへ行って、楽しい一日を過ごした。私たちは、美術館やコンコルド広場、

凱旋門にシャンゼリゼ大通りなどを回った。フランス人の生徒たちの中にも、この世界中に知られた花の都パリを見るのが初めてという者がいた。私も、車の洪水や、天国のような街のたたずまいにびっくり仰天のし通しだった。そして、にわかには不安に襲われた。アウレフの友達にこのことを話しても、もしかしたら誰も信じてくれないかもしれない…お昼になり、私たちは、ある大きなレストランで昼食をとった。その後、パリの真ん中にある森で 1 時間ほど休憩し、またこの巨大都市の探検を続けた。エッフェル塔にも行ったが上には登れなかった。生徒は 6 人ずつの班に分かれており、各班で訪れた所について後でレポートを書くことになっていたの、各自ノートと鉛筆を携えて熱心に記録を取った。この課題は、私にとっては、作文の表現技法を上達させるのにとっても良い機会となった。この日パリを立ってオセールに着いた時はもう夜になっていた。とても疲れたけれど、とても有意義な一日だった。



パリ、ノートルダム寺院 (2002 年記者撮影)

フランスの田舎の夏休み

学期末の一週間、私はユーゴ先生の従兄弟のユーゴさんの家にやっかいになった。従兄弟のユーゴさんは公務員で、奥さんは専業主婦だった。ユーゴ夫人は毎朝市場へ買い物に行く時、いつも私を連れて行ってくれた。プーランさんも、二日おきくらいに、大抵は午後になって来ては、私を車で街や郊外へ連れ出し、また夜になる前に家まで送り届けてくれた。次に私は、プーランさんの両親のところにも泊めてもらった。フランス滞在中最も長い期間滞在したのは、このプーランさんの両親の家である。彼らの家は、リンドリイ (Lyndri) にある大きな農場で、農場の周りの自然の中をぶらぶらと歩くのはとても楽しかった。私は農場の仕事を手伝ったが、トラクターが畑を耕して行くのが、なんとももの

珍しかった。それに、当時まだ人力だった脱穀機の仕組みも気になったが、こちらの方はまだ刈入れのシーズンでなかったので、動くのを見ることは出来なかった。毎朝牛を牛舎から放牧場へ連れて行き、夕暮れにまた連れて戻るといった仕事もした。乳絞りもやったが、機械が使われているのが驚きだった。瞬く間に何杯もの桶が牛乳で一杯になっていく様子に、私は目を見張った。緑の牧野や、毎日飽きるほど飲むことが出来る牛乳の話を、私は喜び勇んで手紙に書きアウレフの家族に送ったが、一方心のどこかで、果たして家族はこの話を信じてくれるだろうか、もしかして私を嘘つき扱いするんじゃないかと心配だった。農場の食事は量もたっぷり、牛肉、豚肉、鶏肉、時にはウサギの肉も出され、皿にはいつも沢山の揚げた野菜が添えられていた。その上、リンゴやナシなどの果物も、木の下に拾いに行けば、いくらでも食べられた。



イメージ画像：フランスの田舎（2006 年訳者撮影）

リンドリオの農場での滞在中、私は二週間ほど、大きな河の畔にあるバカンス村に行った。私と同じ年頃の子供がたくさん参加しており、私は彼らと深い友情を育んだ。ここでも私は指導役の大人から高く評価されたが、参加者の中で黒人は私一人だったので、大人たちは私が差別されたりしないで楽しめるよう、とても気を使ってくれた。農場での生活はあんなに快適だったのに、このバカンス村からはいつまでも帰りたくないと思ったほどである。もしフランス滞在で一番幸せだったのはと訊かれたら、私は迷いなく、このバカンス村にいた期間だと答えただろう。私はここで、ロッククライミングや水泳を覚えた。ついでに、都会の子供風の如才ない振る舞いも少々身に着けたと思う。フランス語の方も、他者とのチャンネルはフランス語しかなく、フランス語しか耳に入ってこないのだから、この頃にはかなりフランス語の表現や話法に馴染んでいた。

ところで、シャンプレーランの学校の級友の家族が、こぞって私を招待したがったことは既にかいたが、驚いたことにその中のある家は、私をこのバカンス村まで追いかけて来た。彼らはバカンス村の校長を、必ず日没前までにまた送り届けるから、とかきくどいた。校長先生は、私さえいいならと、念のため一筆書くことを条件に許可を出した。私を招待したのは、両親と一人娘の三人家族だった。ある日曜日の朝早く、その家のお父さんが車で

迎えに来てくれて、まず彼らの家へ向かった。半時間ほどで到着し、暖かくもてなされて、私はくつろいだ気分でも過ごすことが出来た。昼食の後、小父さんは私に、今日これから出かける場所には、他所行きの服を着て行った方がいいのだが、どんな服を持って来ているかと聞いてきた。私は持ってきたスーツケースを開けて見せた。小父さんはズボンとシャツを一着ずつ、それにまあ他所行きと言える上着を選び出した。私はそれらに着替え、更にもらったネクタイを結び、仕上げに上着の左上のポケットにハンカチーフもさした。午後二時ごろ、私たち四人は出発した。小父さんは運転しながら、しきりに車のワイパーを動かしたが、当時の車のワイパーはまだ手で操作するタイプのものが残っていて、見ていておもしろかった。どこに向かうのかは、私を驚かせたいからと教えてもらえなかったが、私は知りたくてたまらなかった。そのことを小父さんに言うと、

「君を驚かしたいから言わないつもりでいたんだが、どうしても知りたいかい？これから行くのはね、馬術の障害物…」そこまで聞いて、私はすぐ何を指しているのか理解した。

「もしかして、馬術の障害物競争ですか?!」

「おやおや、よくその用語を知っていたね。どこで覚えたんだい？」と、小父さんは驚いた。

「学校で、読解の授業の時、テキストにあったんですよ。」

「それはよかった。本物を、これからすぐ間近で見られるよ。そりゃあ見事なもので、音楽の演奏もすばらしいんだ！競技は何時間か続くんだが、面白くてあつという間に時間が過ぎるよ。」

会場では、小父さんが私の左に、伯母さんと娘は右側に座った。しかし、この会場で私は、また一つ大きな失敗をしてしまった。鼻をかみたくなったので、上着の胸にさしたハンカチーフで鼻をかみ、また元に戻したのだが、これがお行儀の悪いことだと露ぞ知らなかったのだ。その時は誰も何も言わなかったが、帰りの車の中で小父さんは私に注意した。

「ハンカチを持っていなかったのかい？」

私は、胸のハンカチーフを指して、これのことかと訊いた。

「それは飾り用で、実際に鼻をかむためのものじゃないんだよ。明日何枚か君にハンカチを持って行ってあげるよ。」小父さんは言った。

私は恥ずかしくて悲しくなり、ハンカチは持っているが、今日は生憎ポケットに入れてくるのを忘れたと言い訳した。

「どっちにしろ、何枚かプレゼントするからね。」と小父さんは言い、約束通り夜になる前に私をバカンス村まで送ってくれた。

場所が変わると、礼儀に関して失敗を犯すということはしばしば起こる。ある社会では許容されることが、別のある社会では不作法になることもある。いずれにしても私は、その日以降、うっかり不作法な振る舞いをしないように、細心の注意を払おうと誓った。しかし、如何せん、当時私はまだ 14 歳にしか過ぎず、しかもたった 3 か月のフランス滞在で完全にフランス流の行儀作法をマスターするのは不可能だった。こんなこともあった。あ

る日、新聞記者のレイモンド・プーランさんの家に行くと、そこには先に何人かお客さんがいた。彼らはサロンの椅子に座って談笑していたが、私は誰かが私を紹介してくれるのを待たずに入って行ってしまった。そして、それぞれのお客さんのところへ行き、自分の方から握手を求めた。その時は気付かなかったのだが、この初対面の挨拶はまずかつらしい。シャンプーランのカネ校長先生の家へ帰ると、先生は私に優しく諭すように言った。

「誰かと挨拶する時はね、まず、その人の前にちゃんと立つんだ。この時手は、背中側に回しておくこと。ポケットにつっこんでいたり、腰に当てていたりしてはいけない。そして相手が手を差し伸べてきたら、君も握手を返すんだ。気を悪くしてはいけないよ。君がもう一人前の大人だと思うからこそ、注意するんだからね。」

私は決まりが悪くて、もじもじしていた。カネ先生は続けたて言った。

「さて、大人が何か君に助言した時、君はなんと応えればいい？」

私はすぐ先生が何を言わんとしているか悟った。

「ありがとうございます、ムッシュー！」

「そうだ、大変よろしい！」とカネ先生は言ってくれた。

「ところで、君にも何か言い分がありそうだから、今度はそれを話してごらん。」

そこで私は説明した。私たちの社会では、最も年少の者が、まず、年長者への敬意を示すために、自分の方から挨拶をしに行くのが習いなのだ。

「そうか、君の所の習慣は、こことは逆なのだね。でも、今はここにいるのだから、逆の振る舞いをするのは勧められないよ。」